

中島高男さん

1927(昭和2)年4月16日生

陸軍軍属(船員)

所属 対馬丸



●1942(昭和17)年12月 日本郵船採用

横浜の海員養成学校をトップで卒業。対馬丸乗員となる。

●1944(昭和19)年8月17日 対馬丸那覇港入港

トラック島が大空襲を受けて、ものすごい船が撃沈されて、そこに補給にいったんです。帰りに運よく沖縄に戻ったんです。どうやら疎開船になるらしいとニュースが入りました。朝からものすごい疎開者が乗船してきました。

もう、ほとんどが子供なんですね。船に乗った人は記録によると、学童、一般疎開者1661名です。その中に、学童小学校3年から中学校までは、約800名のついていたんです。半分ですね。後の記録ですけどね。後で助かったのは59名しか残らないんですけどね。小さい大砲があるんですけど、41名の陸軍兵隊さん、船員が86名の 合計1,788人載っておりました。

●1944(昭和19)年8月21日 那覇港出港 ジグザグ航行をしなかった対馬丸

対馬丸は夕方6時半ごろ、出港しました。この対馬丸よりちょっと小さい小型船で、2隻の貨物船がまっけて、駆逐艦1隻、砲艦1隻で、護衛艦で5隻の船団で北上していきました。21日の晩は何事もありませんでした。

22日の朝から、台風が発生しました。海面は波立ってきて、ときどき強い雨がふってきた、日中はそんなわけで、嵐の中を進んでいくんですね、老朽船で船足が遅いんです。最高で12ノット。自転車くらいのスピードですね。今の競輪の選手にはかなわないです。船団から遅れがちになります。ただ、一番大切な船なので、まもっていかないといけない。潜水艦をさけるため、ジグザグ航海をするんですね。でも、対馬丸は遅れを取り戻すため、ジグザグ航行ではなくて、直線航行になってしまったんです。

●1944(昭和19)年8月22日 午後10時 対馬丸魚雷命中 阿鼻叫喚の船内

見張りを終えて、船室に戻った時、汽笛が鳴ったんです。船の悲鳴のように鳴ったんです。「潜水艦だ」と思って、椅子を立ち上がったんです。左後方ですごい爆発が起きたんです。ベットのところまで飛ばされたんです。

一発は一番船倉のした喫水点の下、2発目は機関の下、3発目が機関員のいる場所に当たったんです。機関員は死んじやいますね。もう、轟沈してしまうとその時わかりました。

救命胴着をつけて一番先に出たら、爆発のショックで鉄板のドアが開かないんです。体当たりをして、ようやく出たんです。蓋に載っていた人から、全部深い船倉に落ちこちたんです。奈落の底で、真っ黒で、中を見ると、忘れられません。夢にまで出ます。ものすごい勢いで船倉に滝のように水が流れてきて、人間と荷物とそれが渦巻きになっているんです。悲鳴が聞こえるんです。助けて、助けてと悲鳴が聞こえるんです。それを見たとき、これが地獄というものかな、と思いました。ものすごい状況でした。夢に出るんです。今でも。そういう状況を見て、これは大変なことになった。もう、梯子もなくて、10数メートルの下に助けにいけないですよ。見殺しにして、右舷の甲板を走ってポートデッキに向かったんです。

ものすごい浸水しているんです。上に積んでいる荷物から人間から、海に落ちていくんです。ブリッジではマイクで「退船」と叫んでいるんです。ポートの上から15メートルくらいのところから、真っ暗な海の中に飛び込んだんです。そしたら、垂直に飛び込んだので、深く潜ってしまったんです。浮き上がるのに精いっぱいだったんです。船から20-30メートル離れたんです。すごい音がしたんです。船が垂直になって、その瞬間ボツ海の中に消えてしまった。

その沈む速さは一瞬です。140メートルくらいの船でね。船が沈んでから、海面に空気の塊がドボツと上がってくるんです。それと一緒にいろんな浮遊物が上がってきて、ものすごい勢いでね。その中に混じって人間がぼこぼこ浮き上がってくるんです。救命胴着をつけた大人から子供が。それを見ると、身の毛のよだつ様子です。

(取材日:2006年4月30日)

皆頭が海に突っ込んで、海面一面に浮き上がるんです。救命胴着をつけているから浮いてくるんです。それを見て、どうしたらいいのか？と思いました。

1枚、竹の筏、長さ2メートルくらい。こういう筏があって、6枚つなげたのです。泳いでいる人を引っ張りあげたんですよ。50～60歳くらいのおじさん一人、17～18歳くらいの娘さん、小学生くらいの男の子2人。お母さん、赤ん坊を抱いて救命胴着をきて泳いでいる人、6枚の筏に赤ちゃん入れて7名乗った。遠いところから「おーい」と声が聞こえた。そしたら、偶然にも知り合いで、合計8名になったんですね。

●漂流

漂流が始まったんです。船からだいぶ流されていて、水平線の向こうに島が見えるんですね。なんとかあの島にながれつかないかな？と思っていたら。どんどん離れてしまった。朝になって、かすかに島の頭がみえるだけになった。海流にのってどんどん流されていったんです。23日の夕方に、スコールがきたんです。ざっと降ってきたの。これは、海の水は絶対飲んだらだめだ、あめが降ったら、腹いっぱい飲んでくださいと皆にいったんです。飲めるだけ飲んだんです。

ところが、夜になったら波のしぶきも変わるの。雨にぬれているでしょう。赤ちゃんが、寒くてかわいそうだった。震えているから。水夫の服をあかちゃんにくるんであげたの。お母さんが、おっぱいを飲ませているような格好をしているわけです。でも、赤ちゃんが泣くんです。大丈夫かな？とおもっていたら、お母さんが眠くて、赤ちゃんを落としたの。誰も助けられないから、海に飛び込んで助け上げたの。

24日、太平洋のど真ん中に出してしまったような感じなんです。黒潮に乗ったのが分かるの。九州方面に向かってるな。このまま筏に乗っていると助からない。自分でも見張りをやっていたので分かるんですが、見張りをするとき、何か突起物があるとよく見えるんです。竹の棒を一本ひんむいて、昼間は暑いんですよ。上着を竹の棒にひっかけて、旗のようにして揚げていたの。望遠鏡で見ても目立つはずなんです。何もなくて、筏に乗っているだけだと見つけにくい。それをやっていたんです。手で持つので疲れますよ。

漂流中に一番つらいことは眠くなること。居眠りしちゃうの。自分では、眠っちゃだめだよと怒鳴っているけど、居眠り半分なの。夜24日、2時か3時くらいですけど、どうしようもない筏の上で、うつらうつらしていたんです。そしたら、前の筏でどどんと音がして、娘さんが落ちちゃったんです。あつという間に10メートルくらい流されたの、助けてと叫んでいる。しょうがない、また飛び込んで助けにいった。溺れている人を助けるのは難しいんです。正面からいったら駄目です。後ろに回って、脇の下から手を入れて、あごをあげて、後ろから抱えて助けるの。やっとの思いで筏に戻ってきて、もう眠らないでくださいよといったの。

24日の晩それがあって、25日になった。丸3日目ですよ。北東にどんどん流されている。何にも見えない。今日、助からなかったら、この8人中で誰か死ぬんじゃないかと、最初に死ぬのは誰だろうな、赤ちゃんか小学生の子供か、そんなことを思いました。でも、自分が死ぬとは思いませんでした。自分が船員なので、遭難した場合は、人を助けないといけない義務がある、そう思っていました。

●1944(昭和19)年8月25日 救出と緘口令

夕方5時過ぎです、今日も駄目なのかなとあきらめていたとき、西の空に晴れ渡って夕日があったんです。波も静かになって、その時ですね、誰だかが、船が来たぞと声が出たの。振り返ると、はるか水平線のほうにマストが2枚あるの。どっちにいつているのかな？とみると、前のマストが左向いていて高いの。ああ、あの船は南西に向かっている。こちらは北東に向かっている。なんとか助けをもらいたい。この時ばかりは、筏の上に立ちあがって、竿をふっていたの。日暮れ間近になって、船がこちらに来たんです。助かったと皆8名全員泣きました。うれしかったです。8名全員助かって。

何時間もかかって鹿児島に入港しました。夜の8時過ぎだと思います。上陸したら、憲兵隊が待っていた。何を言うかという、船員はこっち、疎開者はこっちと、御苦労さまもなく、ただ命令だけです。同じ漂流者の名前もきけずに別れてしまったのです。

1週間ほど日赤病院で治療を受けて帰ったんです。鹿児島から汽車に載せられたんです。船員が6名。窓を全部閉めさせられて、憲兵が両方に立っていて、口をきくな、窓をあけると囚人のように扱われました。そういう思いをして、大阪まで行ったの。大阪でやっと解放されたんですが、憲兵隊が船のことは一言もしゃべってはならない、もししゃべったら軍法会議にかけられる。対馬丸のことは誰にもしゃべったら駄目だと。

(取材日:2006年4月30日)